幼児の教育　第109巻　第3号　平成22年3月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集
いま、倉橋と出会う3
「子どもたちを送る日」

3
2010

第109巻　第3号　日本幼稚園協会

最新刊

新学期、これさえあれば安心！

幼稚園対策　実践の読み解きに最適！

36501

環境図や評価の視点など、項目が充実！

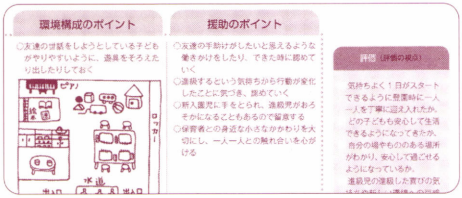
改訂2版　わかりやすい　幼稚園

指導計画作成のすべて

22年2月刊行　　柴崎正行／編著

平成21年実施の「幼稚園教育要領」に完全対応。計画の書き方・教育課程や実践の理解を深めるためのポイントがわかる。

26×21cm　280ページ　定価2,415円（税込）



インデックス付きでわかりやすい！

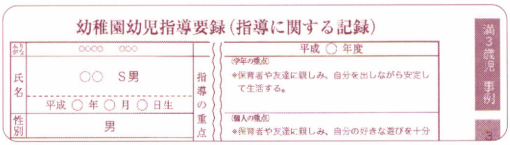
改訂新版

幼稚園幼児指導要録 解説と記入の実際

22年2月刊行　　柴崎正行／編著

平成21年に改訂された「幼稚園幼児指導要録」の解説と共に、記入する際のポイントをわかりやすく紹介。

26×19cm　152ページ　定価1,260円（税込）



36201

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第109巻　第3号

目　次

● 巻頭言 ●
自己物語の始まり　田中智志 …… 4

● 特 集 ●
いま、倉橋と出会う 3 「子どもたちを送る日」 …… 8

贈る笑顔　松井とし …… 9

子どもたちを送る日、それは保育を振り返る日　河邉貴子 …… 16

◆ インタビュー ◆
「子どもたちを送る日」から―保育のはかなさ　鈴木とく …… 22

ミュンヘン公立キンダーガルテンのめざす保育　ベルガー有希子 …… 28

● 保育の創意工夫（3）●
朝のお迎えの工夫　前原　寛 …… 34

乳幼児期の育ちと保育を考える
幼児の教育
第109巻　第3号

● 幼稚園の源流を求める旅（2）●
エリザベス・ピーボディーの世界の住人たち　国吉　栄
38

● 教育学者のあたふた子育て・親育ち（2）●
母として保育者の専門性を考える（2）　佐久間亜紀
42

●『幼児の教育』ネット公開に寄せて（15）●
先人たちからの贈り物　椨　瑞希子
48

● 保育の現場から ●
四歳児の三月に思う　高橋陽子
54

● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み（39）●
保育学会自主シンポジウム
「女子大における総合的保育者養成の試み」
を振り返って（2）　菊地知子
58

巻頭言

自己物語の始まり

田中智志

私たちは、「自分の人生」といえる物語を作りながら、また、それを演じながら生きています。「自己物語」と呼ばれているこの自作自演の物語は、自分にまつわるさまざまな思い出、すなわち生まれ育った家、遊んだ場所、通った学校、共に暮らした家族、共に語らった仲間、共に働いた同僚、そして出会い、別れ、死別、秘密など、過去のさまざまな出来事から構成されています。

自己物語の中の過去の出来事は、たんに古い順に並べられているのではなく、その主人公である〈私〉の観点から、因果的に結びつけられています。たとえば「あの時の彼の言葉で、自分は進路を決め、いまの自分がある」といわれるように、過去の出来事は、現在の〈私〉を生みだす契機として意味づけられています。

こうした自己物語は、一つのストーリーです。言い換えるなら、客観的現実というよりも、一つのフィクションです。実際には「あの時の彼の言葉」は、進路を決めるうえで大した意味をもたなかったのかもしれないが、振り返っているうちに、いつの間にか、その言葉が重い意味をもつようになっていきます。私たちは、いわば後追い的に過去の事実を価値づけ、脚色しています。

こうした〈私〉の自己物語は、他者の自己物語と交換できません。自己物語は、一人ひとりに固有な物語であり、代替不可能です。私たち一人ひとりがかけがえのない存在であるのは、私たち一人ひとりが固有の自己物語を生きているからです。たとえば、経済学的にいえば同等の貧しい家に育とうとも、その境遇を力強く生きる活力に変える人もいれば、その境遇を自暴自棄の理由に変える人もいます。経済学的な同一境遇の意味は、当人の自己物語によって変わっていきます。

日々の経験も、自己物語によって意味づけられています。たとえば、自分を否定的にとらえ、誰も信用できないと考えて生きていれば、誰かに自分の誤りを指摘されたという経験は、自分のプライドが傷つけられる経験であり、その人を嫌い、遠ざける理由になるでしょう。しかし逆に、自分を肯定的にとらえ、人は人と共に生きる存在であると考えて生きていれば、同じ経験は、自分を高

める契機であり、その人に感謝し、人間関係を深めようとする理由になるでしょう。人生物語の違いによって、人の言動は大きく変わっていきます。

人が、いつごろから自分の自己物語をつくりだすのか、はっきりわかっていませんが、その始まりは、幼児期の子どもに見いだすことができそうです。人の記憶は、早ければ、二、三歳くらいにまで遡行できますが、そのおぼろげな記憶、記憶ともいいがたい痕跡が、自己物語の礎（いしずえ）となる過去の出来事なのでしょう。

自己物語の礎となる記憶はさまざまですが、その一つは、夢中で遊んだという経験、一心不乱に何かに取り組んだという記憶です。そうした経験（記憶）は、濃密で充実感に満ちています。それは、誰かに指示されていやいややったという遊びではなく、自分がやりたいと思っていることを、思う存分にやったという記憶です。そこでは、自我がいわば溶解してしまい、自分が遊びと一体になって何かを創造していきます。その解放感・充実感は、自分の人生を物語化する重要な記憶として、心に刻まれていきます。もちろん、どんなことに夢中になったのか、遊びの内容の多くは、忘れられてしまいます。しかしそれでも、その時の解放感・充実感は心の奥底に残り、この世界への肯定感情を生み出していきます。

もう一つの記憶が、誰かに支えられた、大切にされたという記憶です。ひと言で言えば、他者との深い関係性（心を通わすつながり）の記憶です。他者との深い関係性は、心の奥底に少しずつ積み重なり、のちに生成する自律性を支える礎になっていきます。その事実は、関係性の中を生きている時にはわかりません。長じて子ども時代を振り返る時、初めて意識化されます。たとえば、ふるさとに久しぶりに帰ってきた時に感じる何とも形容しがたい安堵感は、この関係性が意識化される時に生まれる感覚でしょう。あるいは英語圏の人々が「マイホーム」「ホームタウン」という言葉に感じる、懐かしく心安らかな思いも、この関係性が意識化される時に生まれる感覚でしょう。

私たちの人生が自己物語によって基本的に支えられていると考えるなら、幼いころの経験は、人生物語の基礎であり、実際に生きる人生の礎です。夢中になってやった遊びの経験、誰かに無条件に愛されたという経験――こうした経験は、なるほど、直接に有能さ・卓越性に結びつかないものですが、そうした能力を支える土台です。心の強さ、気概、気高い志といった、本当に人生を肯定する力は、この土台に支えられていると言ってよいと思います。幼児教育が極めて重要なのは、そこで人生の真正な礎が築かれるからだと思います。

（山梨学院大学大学院教授）

特集

いま、倉橋と出会う3

倉橋惣三（一八八二―一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

子どもたちを送る日

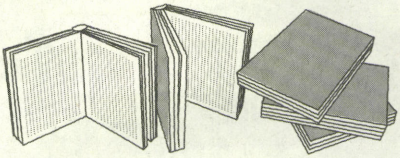
何たる縁か。こうして親しく、あなたの為には大切な幾とせを、日々にいっしょに楽しみ得たことか。

「教育」。そんなことよりも、あなたを迎える朝な朝なが私の楽しみでした。「あなたの為」。そんなことよりも、あなたといっしょに遊ぶことが私の喜びでした。

ただね、今になって考えてみると、随分行き届かないことが多かったと、それが、すまないのですよ。けれどね、御免なさいなんて、そんなことは決していいませんよ。私の足りないことを、あなたは何とも思ったりしていないと、それが、しっかり、私に分かっているから――。若しそうでなかったら、こんなに、にこにこと、あなたの修了をお送り出来るものですか。

「いい先生」、そんなこと、どうでもいいのね。あなたのすきな先生だったのですものね。ほんとに、そうだったんですのね。

倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』フレーベル館　二〇〇八年　p.43



贈る笑顔

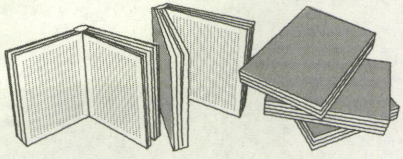
松井とし

「子どもたちを送る日」と題されたこの文章は「育ての心」につづられているほかの文章とはいささか趣の異なる文章である。多くの愛読者を感動させる、端的で凛とした倉橋の筆致とは異なり、三行目からは保育者の想いを代弁する形式だ。

倉橋はこの保育者に、読者に伝えたい保育の真髄を語らせている。論説とは異なり、臨場感も加わり、読者の共感をよぶのだろう。しかし読めば読むほど奥が深く、表面的にさらっと読み過ごすことはできない一文である。

卒業の日、入園当初の様子からは見違えるように成長し、自立した子どもたち一人ひとりの晴れやかで颯爽とした様子を目で追いながら、保育者が心の中で語りかけている言葉。そこには卒業までの日々を共に生活してきた担任と、子どもたち一人ひとりとの強い絆が感じられる。

それにしても保育を体験したことのない倉橋が、子どもたちを送る日の担任の心情、子どもたちとの信頼関係の機微をさりげなく言い表していることに驚く。



「『教育』。そんなことよりも、あなたを迎える朝な朝なが私の楽しみでした」と語る保育者の思いは、子どもたちはどのような顔をして現れるのだろうか、共に過ごす今日という日はどのような一日になるのだろうか、と期待する心もちである。

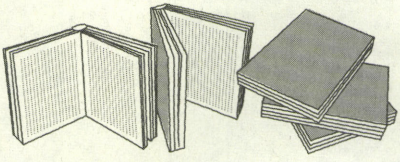
言うまでもなく　あらかじめ枠組みをもって「教育」をしよう、と構えて迎えるものではない。保育の見通しや計画をもちながらも、子どもたちがその日、意欲をもって始める遊びを受容し、尊重しながらかかわるゆとりある姿勢である。

続けて「『あなたの為』そんなことよりも、あなたといっしょに遊ぶことが私の喜びでした」と語りかけている。子どものためというより、自分にとって共に遊ぶことが喜びであった、というのである。しかし、何も考えずただ楽しく遊んでいればよいということではないだろう。

この三行目、四行目の文章は、遊びの本質と、いまも変わらぬ「保育」という営みの難しさをはらんでいる。

大人になってしまった者にとって、子どもと共に心から楽しみ、遊ぶことは簡単なことではない。共に遊ぶことができるということは、保育者としての専門性の基盤をなす重要な資質である。

子どもが眼を輝かせ、楽しみ、試行錯誤を重ねる遊びは、子どもを温かく見守る保育者の存在、ものや自然の環境によって引き出されるものである。保育者は子どもと



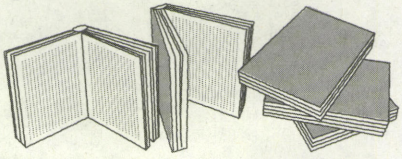
共に活動することを心から楽しみつつ、子どもの自己実現の過程を支える。一方で意識を分化させ、幼児理解を重ねつつ、常に思考しているもう一人の自分がいるのである。子どもたちが興味、関心をもっている遊びをさらに充実、発展させていくために、どのようなものが必要か、どのようにかかわるか、保育者も試行錯誤をしながら状況をつくっていく。子どもたちの主体的な遊びを中心とする生活全体を通して、その日が子どもたちにとって意味のある日となるよう心を砕くのである。

「受け入れ・認める」と「教え・導く」[注1]二つの役割を行ったり来たりしつつ生きるあり方は、当時もいまも変わらない保育者の本質的な役割である。

しかし、子どもたちの主体的な遊びを尊重し、保育者の願いとのバランスを大切に行われる援助はさりげなさを伴うので、外からは見えにくい。それゆえに今日においてさえも、いまだに一般社会では「幼児の主体的な遊び」の本質的な意味が理解されていないのだ。

ところで、保育者が笑顔で子どもたちを送り出すことができる、ということはいったい何を意味しているのだろうか。

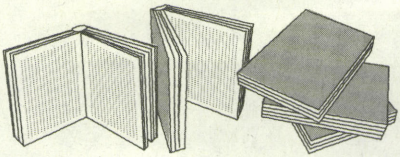
この保育者は行き届かないことが多かったことを認めつつ、「御免なさいなんて、そんなことは決していいませんよ」と言い切っている。なぜなら自分の足りなかったことを子どもは何とも思っていない、と「しっかり、私に分かっているから―」と述べ、



だからこそ、にこにこと笑顔で修了を送ることができるのだ、と語っているのである。「笑顔で送る」ことができる保育者と子どもたちとの間には、格別な絆が存在していたのであろう。考えるにそれは子どもたちとの信頼関係を基盤に、互いに心から楽しみ、充実した日々を積み重ねたことによりうまれる協働性である。さらに保育者という役割を超え、子どもたちとの間に相互作用を生み出す、自由感あふれる対等な仲間関係ではないかと考えられる。共に生き、共にはぐくむ関係である。

担任になって間もないころの多くの保育者は、子どもたちを送る「晴れの日」を別れの日と感じてしまう。そしていろいろなエピソードを思い出し、成長したわが子を見るように感動し、こみあげる想いに涙するものだ。つたない保育体験だが振り返ると、私はある時期から子どもたちが主体的に始めた遊びが次々と連鎖的に新たな遊びを生み出し、思いがけない充実感が導き出される喜びを味わうことができるようになった。子どもたちが自分の予想や計画、既成概念を超えた時、保育者とか子どもとかいった区別なく、心から共感し合える関係がうまれる。子どもたちと日々を創る生きがいを感じられるようになった時期、それは、幼稚園を巣立つ子どもたちを笑顔で送り出せるようになった時期と重なっている。

現行の「幼稚園教育要領」では、子どもたちが協同する経験を重ねることを重視している。人間関係の内容の取り扱いにおいて「幼児が互いにかかわりを深め、協同し



て遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」と、協同する遊びの重要性について述べている。

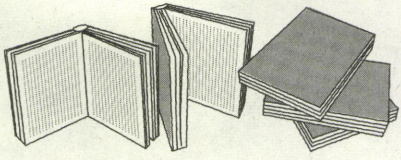
協同する遊びが充実するために、保育者にはさまざまな役割が求められる。集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的がうまれる過程、子どもたちのいろいろなアイディアをつなげ、共通の目的を明確にしていく過程、試行錯誤やトラブルなどの葛藤体験を乗り越えていくそれぞれの過程を受け止め、支えることが重要である。[注2]

子どもたちと共に活動しつつ、その役割を自分の喜びとして果たす保育者、その人はきっと子どもたちの卒業をにこにこと笑顔で送る人なのであろう。

この文章を読んでいるとなぜだろうか、故菊池ふじの先生のまろやかでかわいらしく、少し高いお声がよみがえってくる。

菊池は倉橋が理想とした保育者の一人だと言われており、小柄で穏やかな物腰で、いつも笑顔を絶やすことがなかった。私が実習生だった当時は、附属幼稚園園長だった故坂元彦太郎先生に寄り添うように、教頭職を勤めておられた。

子どもたちと共に楽しみ、充実した日々を過ごした実践と言えば、菊池の誘導保育「人形の家」が思い起こされる。子どもたちとの日々を振り返り、菊池が記した文章からは、夢中になって人形の家づくりに励む、若き日の菊池と子どもたちの様子が目

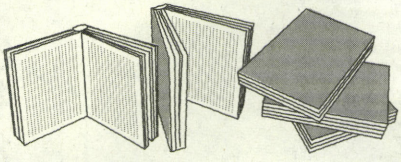


に浮かぶ。[注3]

ある日、菊池は、さして多くはない材料費の中から二体の人形を買い求め、幼稚園へ持って行く。子どもたちは喜び、代わる代わる人形を抱きかわいがる。菊池は「先生はね、このお人形たちのお家を拵えてあげたいの」と語りかける。「そうだね」と男の子がまず賛成する。家には窓を付けカーテンを下げよう、みんなで床の敷物の縫い取りをしよう、と提案すると「かわいい人形のために」という思いが共通の目標となり、子どもたちは眼を輝かす。

菊池は郷里の自然の中で竹やぶや裏山などにむしろを敷いたり、板を渡して板の間にしたりして各々自分の家をつくり、互いの家を訪ね合い友達と楽しく遊んだ原体験をもっていた。人形の家であると同時に子どもたちの家としても遊べるように設計するが、柱を直角に切るということが難しく、骨組みが少し曲がりでき上がった家は少し傾いていた、という。

少しずつ体験を重ね、子どもたちは残らずのこぎりやカンナを使いこなすようになった。柱の組み立てが終わると床を張る。板の長さを測ることは菊池がするが、板を切ること、打ち付けることは子どもたちが行い、代わる代わる釘を打ったり、押さえたりし合ううれしげな顔、見ている菊池までがたまらなくうれしくなった、という。壁を張り、窓を付ける。床板が張られたころから子どもたちは「天井の無いお家は変だ」と天井張りをせがんだ。天井は子どもたちの手が届かないので保育者が張り、次



に家を塗る。何色にしようかと迷っていると、倉橋が「この家は、現実味のないフェアリーの住むようなファンシブルなものにするといい」とアドバイスをする。そこで、外はクリーム色、窓枠は水色となった。塗ることは子どもたちを喜ばせ、「塗りたい、塗らせて」と瞬く間に塗ってしまった。次にきれいな壁紙を貼り、子どもたちの絵を写しとったカーテンを下げ、ズック地に縫い取りをしたカーペットを敷いた。その後も子どもたちは関連するさまざまなものづくりに進んで参加し、みんなでつくった家を使って楽しんで遊んだ、という。

最晩年の菊池は当時を振り返り、「ほんとうにあたりまえのことをしただけ」「また生まれ変わって先生になれば同じ様なことをやるだろうと思う」と語っている。

卒業の日、共に楽しみ、よりよく日々を過ごした子どもたちをにこにこと笑顔で送るこの保育者。そっとたたずみ、見守る倉橋の温顔が目に浮かぶようだ。

（淑徳大学専任講師）

引用文献

1　鯨岡峻　鯨岡和子著『保育を支える発達心理学』ミネルヴァ書房　二〇〇一年

2　『幼稚園教育要領解説』二〇〇八年　文部科学省

3　菊池ふじの著『生活に根ざした保育を―誘導保育実践の歩みを振り返る―』編集協力　永井正子　大泉双葉幼稚園　一九九三年

子どもたちを送る日、それは保育を振り返る日

河邉貴子

子どもと園生活を共にしたことがある人ならば、そして、その子どもたちを小学校へ送り出す経験を一回でもしたことがあるならば、「子どもたちを送る日」の一節に対して、共感と深い反省の念を抱くことだろう。本稿では、これを契機に私自身の保育記録をひも解き、修了間際の子どもと保育者の関係を見つめ直してみたい。

担任として子どもたちを送る

人は一生の間に何枚の「卒業証書」の類を手にするのだろうか。少なくとも二枚、多ければ五、六枚だろうか。それはいわば、「住み慣れた世界」から、「新しい世界」へのパスポート。心の中では不安と期待が交錯しながらも、「将来」に向けて強く輝く瞬間でもある。

中でも幼稚園・保育所を修了する時にもらう「修了証書」は特別な一枚に違いない。なぜならば、家庭から社会へと第一歩を踏み出した子どもたちが、人生で初めて手にする証書だからである。

かつて保育者だった私は、五歳児の担任を六回経

験した。修了証書授与の際、子どもの名前を読み上げるのは担任の役目である。「声が震えてはならない」と涙があふれるのを堪えるので、修了式の日はいつものどの奥が痛くなったものだった。「お母さんから離れられなかった○○ちゃんが、こんなに立派になって」と、共に暮らしてきた日々が頭をよぎり、あるいは「私のかかわりは適切だったろうか」との思いが込み上げる。すっくと園長の前に立っているその自立的な姿を見ると、もう涙がこらえ切れない。

園長として子どもたちを送る

その後、何年か後に私は導かれて短期大学の教員になり、幸運なことに附属幼稚園の園長を兼務して七回の修了式を執り行わせていただいた。修了に当たっての園長の大役は、彼らに修了証書を渡すことだ。私たちは一生のうちに何枚もの証書を手にするが、幼児にとっては生涯初めての体験である。見たことも触ったこともない証書という一枚の紙の意味をどう認識しているのだろう。

「修了式って何をする日?」と尋ねてみたところ、「幼稚園とお別れする日」「ありがとうを言う日」などと口々に答える。そして一人が「園長先生から修了証書をもらう日」と言った。「それじゃあ修了証書って何?」と聞く。「大切なもの」とは答えるが、それがなぜ大切なのかはわからない。そこで見本を見せて、「これが修了証書。みんなは幼稚園で

いっぱい遊んで、友達を大切にすることとか、自分で考えることとか、大切なことをしっかりできるようになったから、もう幼稚園はいいですよ、今度は小学生になってくださいという証明書」と説明した。子どもの顔はキラキラと輝いていた。しかしその後、A子がそっと近づいてきてこう言った。

「私、もらいたいような、もらいたくないような気持ちがしてる……」

生まれてからたった五、六年でこんなに豊かな感情の襞をもつようになることに驚く。幼稚園（あるいは保育所）という初めての実社会で、子どもは親から離れ、自分の力で「自分の世界」を築く。「修了証書をもらいたいけどもらいたくない」という気持ちこそ「自分の世界」を築いた証明なのだと思う。

修了間際の目覚ましい「育ち」

修了間際の子どもの育ちには目をみはるものがある。私が担任をしていた園では、修了式前の最後の行事として、ささやかな音楽会を開くことになっていた。幾つかのグループに分かれ、自分たちで演奏する楽曲を決めて保護者に披露する。子どもたちは、私が声をかけなくても自分たちで集まって練習をし、練習が終わると「お待たせ」と言いながら仲間の遊びに戻っていく。その姿は実に主体的で、行事として課せられているから取り組むというのではないことがわかる。彼らは近くに迫っている「お別れ」を意識し、心を寄せて一つの方向に向かうことに喜びを感じているのである。ちょうどそのころの保育記録を読み返してみると、次のように書いてある。

○二月十四日

ちょっと声をかけただけでグループごとに練習にくる。「練習場」と子どもたちが呼んでいるス

テージは一か所なので、自分たちが終わると園庭のドッジボールに戻っていき、「次のグループどうぞ」などと交代し、自分たちで進めている。（中略）自分たちのやることが終わると音楽会の看板作りの手伝いに来たり、友達の練習を見てあげたりしている。二年に一度味わう（二年保育・五歳児）子どもの大きな成長を目の当たりにした時の大きな感激。この想いをするといつも修了なのだ。

この情景を支えているのは何か。それが「育ち」というものである。「育ち」は目には見えないし、測定することもできない。しかし確実に園生活を通して一人ひとりが育ったという事実が、自律的な生活を生む。

いま、自分は何をしたいのか、何をするべきなのかがわかって行動できるようになり、しかも集団として支え合える姿である。ここまで育てば、充分に幼児教育の役割を果たしたといえるのではないか。子どもたちの様子を見ながら、ほっと息をつく。

この音楽会のすぐ後に、翌春入園する子どもの一日体験入園が計画されており、年長組が何か歓迎の出し物をすることになっていた。私は修了式の練習を控えて忙しくなることだし、音楽会でやった曲でも聴かせたらどうかと安易に考えていた。ところが子どもたちの猛反発に遭ったのである。

○二月二十二日

新入園児のためにお店やさんを開きたいといったのはK男である。私の計画（音楽会の歌を歌おう）とどちらがよいか、みんなに図ったところ、子どもたちは全員K男の意見を選択した。同じことは繰り返したくないというのである。学級全体の目指す方向を、先生に言われたからでなく

自分たちで決めて取り組みたいという気持ちの表れを見たように思う。

こうなると、もう「脱帽」である。

義務教育年齢引き下げ論議がたびたび起きる。賛成論者は根拠として幼児の発達が近年早まっていることを挙げる。しかし、私は五歳児は幼児教育を受けているからこそ、しっかり育つのだと思う。五歳児が幼児教育施設にいる意味を考えて議論を進めるべきなのではないか。

心の襞がこんなに細やかになり友達と心情を分かち合える五歳、ある程度の見通しをもって自立的な生活を送れるようになる五歳。そんな彼らが所属する集団の最高学年にいるからこそ、その力は飛躍的に伸びる。

翌月には一年生になって、すっかり「赤ちゃん返り」したように幼く見える彼らだが、心と体に満々と「育ち」を蓄えて修了していくからこそ、新しい世界に喜んで飛び込んでいけるのであろう。

子どもとの関係を振り返る

修了間際は、子どもたちのこのような大きな成長を前にして、保育者としての自分のありようを振り返る時でもある。

子どもはいつでも大人に対して寛容で、**「私の足りないことを、あなたはなんとも思ったりしていない」**ことはわかる。けれども、次に新たな子どもたちとの出会いが待っているからこそ、修了していく子どもたちとの生活を省察しておく必要があるだろう。子どもとの生活は、楽しくなければならないが、楽しければそれでよし、というわけにはいかない。

以下は五歳児を担任していたある年の二月の記録である。

○三月十日―子どもたちを修了させるに当たって

「保育が楽しい」と感じた一年間だったが、「楽しい」と感じている裏に落とし穴はないか。「こう育ってほしい」という強い願いをもち、それを子どもに押しつける時、子どもが思う通りにならない苦しさを感じる。この苦しさを感じなかったということは、

・全体的には子どもの興味欲求に沿った保育が展開できたのか

・子どもとのズレを感知しきれなかったのか

・ズレを感じながらもうまく私の意図する方向へ保育を展開していたのか

のいずれかである。保育歴が長くなると大きな失敗をしなくなる。反面、うまく保育をしているのではないかと不安になる。現在、修了間際にして、それぞれが主体的に遊びに取り組んでいるが、遊びの楽しみ方をもっともっと深めてやれたのではないかと思っている。（後略）

子どもの心もちに寄り添い、自然体で子どもとの生活を楽しめる「先生」になりたいものだ。それはすべての保育者の願いだろう。自分の意図する方へ子どもをうまくまとめていく技術をもつのが「いい先生」ではないし、それが「教育」ではない。けれども、子どもとの生活を省察なくして楽しむのも「いい先生」ではない。保育者とはつくづく「因果な職業」だ。これでよいという到達点はない。いつも「これでよいか、これでよいか」と子どもとの関係を振り返って考え続ける。そこに保育者としての成長があると信じて。

子どもたちが飛び立つ三月。そのまばゆいばかりの育ちを前にして、自分の保育をじっくりと振り返る季節、それも三月である。

（聖心女子大学准教授）

「子どもたちを送る日」から 保育のはかなさ

語り手　鈴木とく（T）
聞き手　塩崎美穂（M）

●鈴木とく先生へのインタビュー

今回は、戦前戦後を通じて保育所の保育実践を支えてこられた鈴木とく先生※にインタビューしました。一九一〇（明治43）年生れ、数え年で百歳になられたとく先生は、「記憶なんてあいまいなものよ」と言いながらも、一九四五（昭和20）年三月十日の東京大空襲の夜に、子どもや同僚たちを探して歩いたことや、倉橋惣三と山下俊郎が発起人となって創設した日本保育学会の初期の様子について話してくださいました。

およそ六十年前の一九五二（昭和27）年三月に、倉橋の企画した座談会が催されましたが、そこで保育所の実践者として鋭い発言をなげかけている、とく先生は、いま、倉橋について次のように語っています。

M　とく先生と山下俊郎先生が愛育研究所で共同研究をされ、それが保育所保育指針などに反映されてきたことはよく知られていますが、とく先生と倉橋

先生とは、どのようなつながりがあったのでしょう。何か思い出されることはありますか。

T　倉橋先生は東京女子高等師範（現お茶の水女子大学）の人、大学の先生、大先生。あのころ、師範学校の先生といえば、とにかく偉い人だったのよ。

M　そうなのですか……。とく先生は山下先生のことをよくご存じですし、一緒に保育学会を立ち上げた倉橋先生という方は、とく先生から見てどんな人だったのか、お教えいただければ……と思ったのですが。

T　私はね、保育学会では荷物持ちだったの。ただの荷物持ち。集金したお金を入れた巾着袋を持っている集金係。それから記録係もしたわね。でもそれは、荷物持ちでしょ。それだけよ。

M　個人的に何かお話しすることはなかったですか。

T　なかったわね。

M　……そうですか。

こうして、倉橋のことを「大先生」だったとして、あまり多くを語らないとく先生の言葉からは、当時の保育研究者と保育実践者の立場の違いのようなものが感じられます。と同時に、保育実践者に必要だった教養や保育研究の重厚な雰囲気を、その大きな存在感をもって提供していた大学人、倉橋の姿も、そこに読み取ることができるように思われます。

●「大学の先生」としての倉橋惣三

とく先生は、保育者に必要なことを、次のように述べられたことがありました。

方面館託児所で、早朝から死にもの狂いで貧しい子どもたちのお世話をした時代でさえ、くたくたになった身体を引きずって、日比谷の音楽堂まで出かけました。大急ぎで仕事用の着物を脱ぎ捨て、少しだけおしゃれをして音楽会に出かけ、むさぼるように聴きました。子どもたちの現状があ

まりに厳しいものだったからこそ、私は音楽を聴きたかった。音楽が、すさんでしまいそうな私の心を支えてくれました。演奏会でのひとときを糧にして、また次の日の保育に向かっていけたのだと思います。

まだ保母という職業が軽んじられた時代でした。けれども私は、たとえば帝国ホテルの絨毯の上を歩いても、帝国劇場へお芝居を見に行っても、どこを歩いても恥ずかしくない、それだけのものを持っている人間でありたいと思っていました。

保育者は子どもの世話さえすればそれでよいというものではありません。保育以外の部分で、その人がどれだけ豊かな人間であるか、それが大切なのではないでしょうか。[注1]

この戦前の方面館託児所に通う「あまりに厳しい」状況に置かれた子どもたちのことを、とく先生は、「騒ぐだけならまだしも、机の上は渡って歩く、小さい子どもをいじめて泣かす、何して遊ぼうとしてもぼやーっとしてたり、言葉をかけても、ニヤーッと笑うだけだった」と書いています。[注2] ほっとするのは、半袖で、スカートを腰までたくし上げ、子どもを次から次へとお風呂場で洗っていく時だったと言うのですから、日常の忙しさや大変さが察せられます。湯気に「頭がぼーっとしてしまうようなすさまじい」保育の中、「くたくたになった身体を引きずって」でも帯を締め直して音楽会へ行く。保育者が人間らしい豊かさを失わないことを、とく先生は常に意識されてきたのだと思います。

そして、倉橋を「大学の先生」だと語るとく先生の言葉からは、倉橋の著作を読み、その人の話を聞きながら保育研究に携わることが、当時、厳しい生活を背景にした子どもたちと向き合う、とく先生にとっては、保育者に必要な人間性や教養を保障する場の一つになっていたのではないかと感じました。

●一九五二（昭和27）年三月の座談会

倉橋が、本誌『幼児の教育』（第五十一巻第五号）への掲載を企画した「幼児問題を語る」という座談会（一九五二年三月三十一日東中野にて開催）の終盤、とく先生は、保育所保育実践者としての発言を求められ、倉橋と次のような意見を交わしています。

鈴木　日本の現実的な生活程度というものは、保育所に子供をやるという程度の生活程度が大部分じゃないでしょうか。

倉橋　私が自分の孫をどこかへ入れようという時ですね。どこへ入れようか、幼稚園へ入れようか。保育園に入れようかと考えたとする。その場合私は国税を出してその国税のお世話になるのはすまん事だと思う。それで自分の孫は幼稚園に入れて、保育所に来なければならない人に席をゆづる。……

鈴木　……実際はソウいう風には考えないんじゃないでしょうか。

倉橋　……幼稚園がないから保育所にお願いするというのはまだいい。しかしそういうところに入園資格がないのに入りたいというのは、何でもかんでも人まかせという悪い習慣だと思う。……

当時、幼稚園の代表的存在であった倉橋に、とく先生は、自分が日々共に生きる保育所の子どもの「現実的な生活程度」、つまり下町の家族が置かれた経済状況や文化環境を考慮すれば、ごく一般的な家庭の子どもは保育所に通うことになるのではないかと尋ねています。そもそも倉橋は、この座談会を「幼稚園であるとか保育所であるとかの分け方をしないで、成程施設としては各自別箇のものになつてはいるけれども、それを一括して「幼児問題」という事についての一つの関心、共同の関心と考え」る

ために企画した、と冒頭で述べているわけです。しかし、最後にこうしてとく先生から保育所入所にかかわる意見が出されると、「**国税のお世話になる**」のが保育所であり、その必要のない人は幼稚園を選ぶのが望ましいという考えや、子育てを「**何でもかんでも人まかせ**」にしてしまうのは悪い習慣であり、「入園資格」のない人が保育所を利用するのはいかがなものかと思う、といった幼保の違いを述べるに至っています。ここには、保育所は貧しい人だけのものという施設観を見ることができます。

誤解のないように付け加えれば、とく先生は、「**子どもがさながらで、生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、教育の目的を、そこへもちかけていきたい**」という倉橋の『幼稚園真諦』に共感し、「こういう保育がしたい」と思いながら、長い間保育を実践されてきた保育者です。「**自由遊びは、保母や子どもの息抜き時間**」ではなく、「**自由遊びこそ子ども本来の姿を見ることのできる時であり、その時こそが、本当の保育だ、と倉橋惣三先生はおっしゃっておられた**[注3]」と、若い世代に倉橋の子ども理解を伝えてくださってもいます。つまり、子どもが自らであることを大事にする点では、倉橋ととく先生の立場は一致しているのです。

ただ現実として、保育所に通っていたのが要保護世帯の子どもであった一九五〇年代だったからこそ、とく先生は、児童福祉法が謳う全ての子どもへの保育について考え、保育所が慈善救済施設ではないことを確認したのでしょう。

インタビューの中で、「お茶の水（附属幼稚園）は附属学校。私は日本女子大出身だから、社会事業なのよ」とおっしゃるとく先生の言葉が印象的でした。同じように子どもの自由や豊かな育ちを保育の中に願いながらも、幼稚園と保育所という別建ての保育施設が日本社会につくられてきたこと、また、二

系の施設をつなぐ保育理論が思いの外脆弱であることは、とく先生と倉橋の議論から六十年経ってなお、私たちにとって大きな課題として残されています。

●保育ははかない仕事

さて、倉橋は「子どもを送る日」において、「行き届かないことが多かった」けれど「御免なさい」は言わないとしています。ここには、人間は完全であることはあり得ない、でもそれこそが人間の豊かさだといった倉橋の思想がよく表れているのではないでしょうか。幼保の違いや、多少の年齢差はあっても、倉橋ととく先生のもつ、子どもとの別れに対する感じ方には、相通じる人間理解があるように思われます。最後に、とく先生の言葉を紹介します。

「基本的に、保育者とははかない仕事なんです。私はそれを悲しいとは思いません。幼児期のことは、記憶の彼方に追いやられていても、その子の人生のどこかで、ふっと思い出してくれることがあると思うからです。それでいいのです。こちらも、時々何気なく、『そういえばあの子、今頃どうしているのかなあ』と思いだす…、そのくらいの距離感でいいのではないかと思っております」[注4]

鈴木とく（日本保育学会名誉会員）

塩崎美穂（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）

注

1　鈴木とく著（聞き役　菅田栄子）『保育は人間学よ』小学館　二〇〇〇年　p.175～176

2　鈴木とく著『感傷ほいく野迷いあるき』全国社会福祉協議会　一九七五年　p.231

3　鈴木とく著『戦中保育私記』チャイルド教育選書　一九九〇年　p.28　（傍点は本文より）

4　『保育は人間学よ』前掲書　p.144

※　戦前には、東京帝国大学セツルメントの託児所や、愛育研究所の戸越保育園などで保育をし、戦後は、東京都の公立保育園の園長、また、保育者養成校の教員として活躍された（編集注）。

ミュンヘン公立キンダーガルテンのめざす保育

ベルガー有希子

ミュンヘンには、現在、三百近くの公立幼稚園があります。それに加えて、教会立など私立幼稚園も三百か所あります。

少子化と言われて久しいドイツの中（現在ドイツの出生率は、1・3）で、バイエルン州の州都、ミュンヘンは、毎年新しい幼稚園が建設され、それが間に合わないほど子どもが増え続けています。

それは、ミュンヘンが、経済的に恵まれていることに加えて、移民の受け入れに積極的であることが背景にあります。

保護者の希望を取り入れるアンケート調査

キンダーガルテンとは、三歳児から六歳児を対象とした全日制の保育施設です。開園時間は、各園によってさまざまですが、朝七時から夕方五時までが一般的です。一クラス25名で、保護者の希望により、午前保育のみ、午後二時まで、あるいは午後五時までと、選択することができます。三クラスある場合には、午前保育、二時まで保育、全日保育と、クラスを分けることもありますが、一般的には、一クラス25名の中に、

三つの異なる降園時間の子どもが集まっています。

さらに、二年前からは、降園時間について改正があり、保育者にとっては複雑に、保護者にとっては便利になりました。

改正前は、お迎えの時間が、十二時お迎えの場合は十一時半から、二時お迎えの場合は一時半というふうに、降園時間の三十分前から、という取り決めがありました。しかし、個々の家庭の事情により、全日保育を選択しているけれども、火曜日は、二時に子どもをお迎えに行きたい、などという希望が増えてきたため、いまでは、コアタイム以外の時間について、曜日によって保育時間を延長したり、短縮したりできるようになりました（コアタイムとは、グループ活動や、個々の保育活動がその間に入る時間で、八時から十二時、あるいは、九時から一時までというのが一般的）。つまり改正後には、月曜日は四時に降園し、火曜日は三時に、水曜日は五時というように、曜日によっての保育時間の調整が可能になりました。

このような保護者からの要望は、毎年一回行われる園のアンケート調査によって行政側の耳に届きます。アンケートでは、保育環境、保育内容、保育行事、保育者などについての、満足度や、具体的な要望などを無記名で調査します。それをもとに、保育者は、自分たちの保育の何が具体的に評価されていて、何を改善するべきであるかを話し合うことができ、行政は、幼稚園の枠組みや環境についての見直しをすることができます。

保護者からの希望で、改善されたことのほかの例としては、午前中のおやつの時間と、お昼寝の時間に関してです。以前は、おやつを一斉に食べる園がほとんどでしたが、朝ごはんを食べてこない子どもたちが増えてきたことを考慮して、部屋の中に朝ごはんコーナーをセッティングしておき、食べたい時に、いつでも食べてもいい、という決まりになりつつあります。お昼寝についても、たとえば、以前は三歳なら寝たくない子どもも一緒に横になる、という方針でしたが、

各家庭の都合に合わせて選択できるようになってきています。

また、保育内容についての要望としては「学校前に、文字を教えてほしい」や、「数字を教えてほしい」という、いわゆるお勉強の要素のある保育が望まれるようになってきました。以前は、文字や数字は、学校で習うものであって、幼稚園では扱わない、という一貫したスタンスだったのですが、保護者からの意見に加えて、社会や家庭のあり方の変化により、幼稚園の存在意義がここ十年で変化しているように見受けられます。

変わってきたキンダーガルテンの意義

二十年前に、東西ドイツが統一されて以来、東から西に職場を求めて若者が移動したり、マルクがユーロになったりと、変化の多いドイツですが、社会の変化に合わせて、家庭や家族という概念についても、議論されることが多くなりました。

二十年前、いわゆる日本で「三歳児神話」といわれるように、ドイツでも、幼稚園に入るまでは母親の手で育てるのが理想的、と思われていました。そして、職場も三年間の育児休暇を保障するところが普通でした。しかし、ここ数年の間に、シングルマザーの増加、経済的な側面などから母親が働かざるを得ない状況にある家庭が増えてきました。それは二〇〇七年から支給されるようになった親手当てが、一年間に限られていることもあり、二年目から職場復帰する母親が増えたことも一因となっています。

共働き家族が増えることによって家庭における子育て力が低下した、とは一概には言いきれませんが、子どもが家庭で過ごす時間が短くなっていることや、最近の脳科学の解明によって、幼児期の大切さがクローズアップされていることから、キンダーガルテンでの子どもたちの生活が見直されるようになりました。

どのように見直されたかというと、キンダーガルテンがたんに子どもを子ども同士で遊ばせる場所から、子どもの発達に見合った学びの機会を与える場所へ

と、意義が変わってきたのです。

具体的には、バイエルンでは、二〇〇五年にバイエルン陶冶・保育プランが定められ、乳幼児保育施設における指針となりました。

バイエルン陶冶・保育プラン（略してBEP）

BEPの原則として、次の四点があげられています。

・幼児期の学びは、生涯続いていく学びの姿勢の基礎となる。

・保育、学び、見守りは、子どもの発達に見合った形で行われる。

・いくら幼児保育施設においての学びが強調されることがあっても、教育学的基本としての〝遊び〟は、大切にされるべきである。

・目標とされる学びのプロセスが成功するには、保育者が子どもを見守り、観察する姿勢が必要である。

BEPの中で繰り返し言われていることは、遊びながら学ぶ、という姿勢であり、子どもの中にある発見する喜びを刺激することによって、学びのプロセスを促していくことです。これまで大切とされていた、子どもの中に、自信と自尊心を育てていく、というような、人格形成的な発達を援助することに加えて、認知的能力、自発的に取り組む能力、また体力を促進することが大事だとされています。

わかりやすくいえば、キンダーガルテンは、居心地のよい場所であるだけではなく、なおかつ、子どもの知的、身体的能力を子どもの発達にあったやり方で、伸ばす場所であるべきだと書かれています。

そして、保育者の役割としては、子どもたち、つまり小さな冒険者が世の中の不思議や法則を見つけ出し、経験することを援助してあげること、と位置づけられています。そこには、明確に、子どものための保育行為から、子どもと一緒の保育行為へと移り変わるべきであると述べられています。

さらに、BEPでは、具体的な保育領域、内容として六つの領域を重点項目としています。

◆言語力への働きかけ

話すことの楽しさに気づくこと。本読みや、読み聞かせについての楽しさを感じ、語彙を広げたり、会話力を伸ばし、言葉で意見を戦わせたりすることができること。お話を説明する力、および、お話を理解する力をつける。

◆数学的学びの幅を広げる

パズル、積み木やボールなど、おもちゃを通してさまざまな形を五感を通して認識すること。手遊び歌や、ケーキを切り分けることにより、数について認識すること。比較したり、分類したり、整理したりする。重さを量ったり、長さを測ったり、お金について知る。

◆自然科学や、技術的学びの幅を広げる

触ったり、こねたり、息を吹きかけたり、匂いをかいだり、風船を膨らませるというような、五感をつかった刺激を通して、また観察する現象に驚くことによって、最初の自然科学の不思議へと誘導される。簡単な実験を習ったり、発明したりして、それを観察したり、評価したりする。簡単な道具の扱い方を習う。生物学の領域としては、葉っぱのような自然物を集めたり、分類したりする。化学や物理学の領域においては、たとえば固体、液体、ガスというような物質の性質についてとりあげる。

◆メディアからの学びとメディア保育

情報コミュニケーション技術の使用、現実とバーチャル世界の違いについて知る。子どもの発達に見合ったメディアとのつき合い方。

◆音楽的学びとメディア保育への働きかけ

聴覚を発達させる。さまざまな楽器や音楽ジャンルを知る。わらべ歌、リズム感の発達。みんなと一緒に歌ったり演奏したりする。音楽で自分の感情を表現する。

◆身体を動かす保育、体育

健康的な身体感情を発達させる。たとえば正しい文法を作るというようなある特定の知的作業の前提とされる、身体および手先の器用さを養う。自分の能力について自信をもつ。協力すること。勝ったり負けたりで

きること。

このように、保育領域についての内容だけを見ると、まるで、学校教育の下請けのように思えるかもしれませんが、実際の保育現場は、学校とはまったく違います。一番違うことは、幼稚園は、生活、遊びの中に学びがあるということです。

幼児の教育において必要な二つのこと

子どもの幼稚園生活において、子どもをせかせることはよくないことだといわれています。といっても、毎日の園生活の中で、昼食前の手洗いなど、○○しなければいけない時間というものは、必ずあります。そのような決まりごとについては、きっぱりと声かけをして、子どもに働きかけます。

しかし、保育者が意図的に準備した保育内容や、生活の中での学びについて、子どもたちが、この遊びは、もっと続けてやりたいとか、夢中になって観察したり、最後まで納得するまで話し合いをもったりすることなどについては、子どもが充分に活動できる時間と、静けさのある環境を保障できるように、心配りをします。学びが、子どもにとっての理想的な働きかけとなるためには、時間の余裕と、落ち着いた環境、この二つが不可欠だからです。そのために、キンダーガルテンでは、充分な自由遊びの時間がとられています。

子どもが、いつまでも飽きずに、同じ遊びに取り組んでいたり、毎日毎日はさみで切り紙遊びに夢中になたりするような時にこそ、子どもの学ぶ力が育っているとわれわれ保育者は見ています。

子どもというものが、教育的働きかけを与えられる対象ではなくて、子どもが主体の遊びの中でこそ、教育的働きかけが、熟成していくのです。保育者は、気づきや学びについての提案、実験する環境などを準備し、きっかけはつくるけれども、あくまで子どもたちが主体となって、学んでいくことが、キンダーガルテンでの基本とされています。

（ロバート・ヘーガー通り幼稚園）

保育の創意工夫 3

朝のお迎えの工夫

前原　寛

保育において最も重要なのは、朝の出会いであるとよく言われます。保育園では「朝の視診」という言葉がよく使われますが、それはたんに健康状態を把握するという意味ではなく、子どもの様子をうかがうと共に、いい出会いから一日を始めるという目的があります。

私の保育園で、子どもの登園時に取り組んでいることがあります。それは、保育者が率先して子どもを出迎えるということです。こう書くと当たり前のことと思われるかもしれませんが、そこに工夫を凝らしています。

当園は、地方の過疎地域にあり、公共交通機関がありません。いわゆる車社会であり、必然的に園児の送迎は、ほぼ全員が保護者の運転による自家用車で

す。園児用の送迎バスはありません。

自家用車での朝の登園風景は、次のようなものが一般的です。保護者は駐車場に車を置き、子どもの年齢によっては一緒に保育室まで行き、ロッカーの荷物を整理し、それから子どもとバイバイをして、職場に向かっていきます。保育園の保護者は共働き家庭が多いのですが、時間帯によっては登園の車が混み合います。駐車場の狭い園では、その時間だけ園庭を駐車場として開放している所もあります。

朝は気ぜわしいものです。時間にゆとりをもって過ごしたくとも、現実にはほとんどの人が分刻みで時間に追われています。起きてから職場に着くまで、余裕をもって過ごせる人は多くないと思います。まして、子どもを保育園に送ってから出勤ということになると、時間との競争という様相を呈してきます。

ですから保護者にとって、駐車場から保育室まで子どもを連れて行くというのは、非常に気ぜわしい行動になります。さほど広くない園庭を小走りになってしまう保護者もいます。そんな中で、むずがる子がでてきます。朝からせわしなく追い立てられたあげく保育室に置き去りにされるような感じを受けてしまい、気持ちが不安定になる子どももいます。泣いたりむずがったりする子をそのままにしてはおけないとわかっていても、仕事に遅れるわけにはいきませ

ん。後ろ髪を引かれる思いで保育園を出て行く保護者、その後追いをして泣いている子どもという風景が、そこでは見られます。

一方、保育者は早出遅出があり、担任がそのような子どもとすぐかかわれるとは限りません。保育園によっては、朝の時間帯にパート勤務の保育者が多く配置されている所もあります。それぞれの園の実情もあるのですが、子どもとの一日が朝のいい出会いから始められる、とは言い難い状況が現実にあります。

私の保育園では、それを避けるために、子どもを率先して出迎えるという取り組みをしています。

具体的にいうと、登園の車が門前の駐車場に入ってくると、すぐに保育者が車に駆け寄り、朝のあいさつをしながら子どもを受け入れます。また、その場で短時間で必要な情報のやりとりをすませます。そして、子どもは保育者と一緒に門に入り、保育園の一日が始まります。

子どもは、朝の忙しさに追われつつ来るのですが、保育園に着くとその場に待ち受けている保育者に安心して車から降りてきます。保護者もすぐに子どもを受け入れてもらえるので、必要以上に焦ることがありません。一台の車が駐車場にいる時間もわずかですみます。短い場合は、一分もかかりません。駐車場の混み合いも解消され、事故の危険性も軽減されます。

登園の時間帯は朝七時半ころから九時半ころまでですが、どの時間帯に来る子どもも、その時、すぐ対応できる保育者が車に駆け寄り出迎えます。担任が出迎えるわけではありません。保育者は、自分のクラスの子でなくても、保護者とやりとりを交わし、子どもを充分に受け入れられるように、常日ごろから把握しています。担任一人でクラスの子に対応するのではなく、保育者集団で子どもを受け入れるという体制をとっているのです。

また、朝、子どもと出会う保育者は、パート勤務ではなく正規勤務の保育者です。最も大切な出会いだからこそ、職員集団の核となる正規職の保育者がかかわります。そして、出迎えの役割は、各クラスの担任だけではありません。正規職員であれば、障害児の担当保育者、調理担当の栄養士、主任、園長も、朝の出会いを担当します。ローテーションの兼ね合いで、子どもと保育者の組み合わせは毎日変わりますが、年間を通すと保育者はどの園児ともかかわることになります。

社会の忙しさを肌身に感じながらも、朝の出会いを大切にし、保育園で過ごす子どもの一日がより充実したものになるように取り組んでいるのです。

（鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長）

幼稚園の源流を求める旅（2）
ー 森有礼の第二次在米時代 ー

エリザベス・ピーボディーの世界の住人たち

国吉　栄

West Street十三番地

ボストンでもう一つ行きたかったのが、West Street十三番地である。エリザベス・ピーボディーは幼稚園を開く二十年前、三十六歳の時にそこに本屋を開いた。単なる本屋ではない。外国書籍の取次ぎであり、貸本屋であり、サロンであり、カルチャースクールの会場でもあった。エラリー・チャニング、ラルフ・エマーソン、ブロンソン・オルコット、ナサニエル・ホーソーン、マーガレット・フラーなど、当時の新知性が集まった。そこは彼女のそれまでの人生の集大成であり、幼稚園運動へと転進していく揺籃（ようらん）の場ともなった。

West Street十三番地の建物は当時のままだった。ボストン・コモンからほど近い、三階建てのレンガ造りの建物である。いまはレストランになっていたが、看板には"Wine. Grille. Spirits"とあり、中は薄暗く入るのはためらわれた。外観だけ見て帰ろうとしたが、やはり去りがたい。思い切ってドアを開け、コーヒーでもい

いかと聞いたところ、バーのカウンターの若者に、もちろん、と招き入れられた。中は思ったより明るかった。丸テーブルに白いクロスがかけられ、ディナー客が来る前の準備が整っていた。

カウンターに座って大ぶりのカップに注がれたコーヒーを飲み、このあたりに書棚があったのだろうか、テーブルはあのあたりか、などと部屋を見まわしていると、壁の一隅に年老いたエリザベスの小さな写真が貼ってあるのに気づいた。実は私は彼女に興味があって、とカウンターの若者に話すと、それならどこでも好きなように歩き回っていいよ、という思いがけない言葉が返ってきた。私は感激して、パーラーはもちろん、彼女たちの住居だった部分も見せていただいた。

当時は一階が公的スペースで、本屋兼談話室、片隅では弟が控えめに薬局を開いていた。二階は家族の住居、三階には家計を助けるため、時には母が下宿人を置いていたといわれる。私は家中を夢見心地で歩き回り、若者に感謝して店を出た。

それほど広くないこの家で、エリザベスは出版事業までしていた。彼女はおそらく全米初の女性出版人であったろうといわれている。のちに幼稚園運動に乗り出した彼女は、世界初の幼稚園専門月刊誌*Kindergarten Messenger*を出版するが、そこにも、この家で培われた出版人としての経験が生かされたことであろう。

*Kindergarten Messenger*の発行所となったのは、当時エリザベスが同居していた妹メアリーの家であった。ハーバード大学近くの閑静な住宅地にいまも残る瀟洒（しょうしゃ）な家で、緑豊かな後庭がある。一八七二年五月のある日、この家にキンダーガルトナーたちが集まり、エリザベスの六十八歳の誕生日を祝ったことが、追悼文集につづられている(*Kindergarten News* vol.4 no.2 Feb 1894)。

目賀田種太郎の序文

エリザベスの誕生祝いが開かれる前の年、一人の日本人青年が教育局長ジョン・イートンの紹介状を持ってこの家を訪ねている。Pinckney Streetに幼稚園が開かれ

てからおよそ十年後、一八七一年のことである。

訪ねたのは目賀田種太郎という十八歳の若者であった。大学南校派遣の留学生で、のちに政府の要職を歴任、専修大学の創立者の一人となる。彼はこの家を訪れることになった事情を、後年次のように記している。

森氏を訪ね、法律学を学びたいという希望を述べたところ、内務省教育局長ジョン・イートン将軍を紹介された。イートン氏は、私を連れてカール・シュルツ内務長官に会いに行ってくれた。シュルツ氏はハーバードで学びたいという私の願いに賛成してくれた。そこで私はイートン氏の紹介状を持ってケンブリッジにホーラス・マン夫人を訪ねた。マン氏はマサチューセッツ州議事堂の正面にダニエル・ウエブスターと並んで像が建てられているほどの著名な教育者である。

冒頭の「森氏」は、わが国最初の駐米外交官として一八七一年はじめから一八七三年三月まで在米した森有礼である。右にあげたのは、森の秘書チャールズ・ランマン著*The Japanese in America* (1872)が後年復刻されるに際し、目賀田が寄せた序文の抄訳である。

私はかつてこの文章を読んだ時、思わずコピーの端に、「役者がそろっている！」と走り書きした。目賀田が名をあげた人々は、すべてエリザベス・ピーボディーの世界の住人たちだったからである。

ジョン・イートンは、幼稚園についての情報を最初にアメリカにもたらしたヘンリー・バーナードに次いで二代目の教育局長となった人物である。一八七一年、エリザベスは幼稚園に関する報告書を作成するためワシントンに招かれ、教育局で仕事をした。途中、末の妹ソフィア・ホーソーンが滞在先のロンドンで死去したため、遺児の世話のために渡欧して仕事は一時中断したが、帰国後、イートンの要請によってワシントンに戻った。米国公文書館には、文字はかすれているが、イートンが彼女に宛てた手紙が何通も残っている。

カール・シュルツはドイツからの政治亡命者で、当時はミズーリ州選出の上院議員であった。故国で直接

フレーベルから教えを受けていた妻マーガレットは、自分の娘と近隣の子どもたちのために、一八五六年、米国最初のドイツ語による幼稚園を自宅で開いた。なお、マーガレットの姉ベルタも、同じく政治亡命者であった夫ヨハネス・ロンゲと共に英国に渡り、ロンドンに英国最初の幼稚園を開いている。

エリザベスはボストンで開かれたパーティーで、マーガレット・シュルツと幼稚園教育を受けて育った彼女の娘アガザに出会い、幼稚園というものを初めて知った。幼稚園に強い関心を示したエリザベスに、マーガレットはフレーベルの『人間教育』の序文の抜き刷りを送り、彼女に自分も幼稚園を始めたいという思いを起こさせたのである。

ホーラス・マンはアメリカの教育制度の設計に大きな影響を与えた教育者であり政治家であるが、マンは彼が著名になる前からのエリザベスのごく親しい友人であった。彼が教育に対する目を開かれたのは、彼女によってであるともいわれる。

そして、目賀田がイートンの紹介状を持って訪問したホーラス・マン夫人とは、言うまでもなくエリザベスの妹メアリーである。メアリーはエリザベスと同居していたばかりでなく、彼女自身も幼稚園に深くかかわっていた。ホーラス・マンが亡くなったのは一八五九年。Pinckney Streetの幼稚園はその翌年に開かれた。一八六三年に出版されたアメリカ最初の英語による幼稚園書で、のちに関信三が『幼稚園記附録』として翻訳する*Kindergarten Guide*は、エリザベスとメアリーの共著であった。一八六七年にエリザベスが「本当の幼稚園」を求めてヨーロッパに旅立った時には、幼稚園はメアリーの手に委ねられた。一八七三年には彼女の家が*Kindergarten Messenger*の発行所ともなる。

目賀田種太郎が森有礼の紹介によって出会った人々は、すべてエリザベス・ピーボディーの世界の住人たちであり、アメリカでも創始されたばかりの幼稚園に深くかかわっていた極めて特別な人たちであった。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）

教育学者のあたふた子育て・親育ち(2)

母として保育者の専門性を考える(2)

佐久間亜紀

はじめに

はじめて出産し、母になりました。ところが、生後七か月を過ぎたころから、娘が原因不明の嘔吐と下痢を定期的に繰り返すようになりました。前回は、母子共に憔悴しきって医師に助けを求めたのに、逆に、医師の態度に深く傷ついてしまった経緯を記しました。

捨てる神あれば拾う神あり

さて、その後、私たちを救ってくれたのは、別の小児科医でした。

この先生は、幾つか質問を私に投げかけながら、四か月間の娘の様子を語る私の話にしっかりと耳を傾けてくださいました。どうやら問題は、隣の布団まで飛んでいくような噴水状の嘔吐があるということのようでした。「内科の僕には原因がわからないから、何か器質的な問題があるかもしれないね。県立病院の小児外科に紹介状を書きましょう。また、様子を知らせてね」とのことでした。

この日の受診では嘔吐の原因はわかりませんでした

が、私ははっきりと、ああこれで私は一人じゃない、救われたんだと感じていました。

クライアントに向き合うということ

いま考えれば、私が救われたと感じられたのは、この医師の姿勢に、二つの点で対人専門職としての専門性がしっかりと示されていたからだと思います。

一つは、この医師が、患者（母親）の話をじっくり聴こうという姿勢を明確に示していたことです。たくさんの患者を待合室で待たせながら、母親の話を最後まで聴くのは、容易ではなかったはずです。もう一つは、この医師がただ話を聴くだけでなく、「一緒に考えよう」という姿勢を示して、具体的な援助行動を展開していたことです。

前回記したように、英語で「責任をもつ」「信頼できる」という意味をもつ「レスポンシブル（responsible）」という単語は、同時に「返事をする」「応答する」という意味も含んでいます。つまり、クライアントの話にしっかりと耳を傾け、きちんと応答することが、専門家として責任ある行動をとるという内実に含まれているのです。

上の医師は、「自分には原因はわからない」とはっきりと伝えたうえで、紹介状を書くかたちで私たちにしっかりと応答してくれました。そして、紹介しておしまいではなく「また様子を知らせてね」というひと言を忘れませんでした。娘の先行きに関する不安そのものはなくなりませんでしたが、私は「共に歩もうと思っていますよ」という医師からのメッセージを受け取ることで、救われたと感じられたのだと思います。

保育や教育の現場では、子どもの異変や問題行動の原因を、これだと断定して示せないことが多いです。しかし、たとえ問題の原因がはっきりとはわからないままだったとしても、教師や保育者から「一緒に考えましょう」「共に歩んでいきましょう」という姿勢が示されれば、当事者は不安になることなく、むしろ支えられたと感じることを、私は学びました。

ナゾが解けた

さて、娘はその後、大きな県立病院の小児外科で幾つか辛い検査を受けて、ようやく原因不明の嘔吐と下痢が続いた理由がわかりました。娘の胃が、大きくねじれていたのです。胃軸捻転症との診断でした。

胃はふつう靱帯や腹膜などによって位置が固定されているのですが、赤ちゃんの十人に一人はその靱帯が未発達なため、胃がねじれてしまい、噴水状に吐いたりするのだそうです。昔「疳の虫」と呼ばれた「虫」は、「いま風に言えば胃軸捻転のことだよ」とのことでした。多くは月齢二、三か月ごろには自然に治るのだそうですが、娘の場合は一歳近くになってもまだねじれたままで嘔吐しやすく、しかもウイルス性胃腸炎による嘔吐や下痢も混じっていたので、わかりにくかったということのようでした。「二歳くらいまでには自然に治るから経過を見ましょう、それでも治らなかったら手術しよう」と言われました。

たらい回しの現実

胃軸捻転が判明してまもない四月、私は職場復帰し、娘は保育園に入りました。その春は、私にとっても文字通り希望の春でした。娘は胃がねじれているため食が細く、しかも嘔吐下痢症を繰り返していたため、離乳食がなかなか進みませんでした。園の先生方なら、どうしたらいいか、相談にのってくださるだろうと期待していたのです。

しかし娘が入園すると、逆に「給食はどうしたらいいですか？　おかゆは何グラムにしますか？　おかずは？」と尋ねられました。「グ、グラム？」

困り果てて主治医に尋ねると、「胃軸捻転の赤ちゃんはたくさんいるから、食事のことは僕らより保育士さんのほうが詳しいよ」と言われます。そこで保育園で再び尋ねると、「医学的なことはわかりませんから、私たちはお母さんからの指示通りにします」と言われます。でも私としても、月齢に応じた必要量や消化しや

すい食材の栄養バランスなど、わからないことだらけで、指示を出したくても出せません。仕方なく再び医師に相談すると、病院の管理栄養士に回されて、離乳食の本のコピーを渡されただけでした。

どの「専門家」も、誰一人として「どうしたらいいか、一緒に考えましょう」という姿勢を示してくれず、本当に途方にくれたのを覚えています。

保育者の専門性

娘の担任の先生にしてみれば、給食は命にかかわることですし、娘の状況を一番よく知っている母親から情報を得て、娘の体調に適した給食を準備しようとしてくださったのだろうと思います。後になって少しずつわかったことですが、娘の担任の先生は、ほかの保育士からも頼りにされる程、責任感の強いしっかりした先生でした。いまでは私たちも頼りにしています。

ただ、この時の私は、なかなか食べてくれない娘と毎日毎日向き合いながら、しかもいつまた嘔吐するかと不安でいっぱいの状態でした。そんな私が第一に必要としていたのは、きっと「何グラム」の給食が娘にもっとも適切かという「答え」よりも、「お母さんにもわからないんですね。じゃあ、どうしましょうか」と、その答えを導くためのプロセスを一緒に歩んでくれる人だったのだろうと、いまになって思います。

「一緒に考えましょう」という姿勢をもち、しかもそれをクライアントに伝えることは、簡単そうでいて、実はとても難しいことなのですね。だからこそ、これこそが対人専門職の専門性の、大切な要素の一つだろうと思うのです。

助けを求めることこそが難しい

以上のように、母になってつくづく思うのは、そもそも助けを必要とする人が、必要な助けを得るのは本当に難しい、ということです。

私の場合も、住んでいる地域には市役所や助産師会、病院やNPOなどが、それぞれの「子育て相談窓口」

をたくさん開設してくれています。それはそれで心強いのですが、私のように、いざ「娘が二度と吐かないようにするにはどうしたらいいの？」と切羽詰まった時、どの専門家にどう相談したらよいか、わかりませんでした。そして、必死に助けを求めては傷つけられることの繰り返しの中で、もうこれ以上傷つきたくないと強く思いました。助けを求めては傷つけられることが続けば、「助けて！」と言うこと自体をあきらめてしまうのです。

三つのハードル

途方にくれた時に必要な助けを得るためには、大きく三つのハードルがあります。

まず第一に、こちらがどんな助けを必要としているのかを自分で伝えなければなりません。でも、本当に助けが必要な時というのは、自分にどんな助けが必要かが、わからない時なのです。

しかも第二に、誰に「助けて」というのが適切か、自分で判断しなければなりません。魚屋に行って肉をくれといってもダメなように、間違った窓口に行って助けを求めても、適当にたらい回しにされて疲れるだけです。でも誰に頼ればいいのかわからないからこそ、途方にくれているのです。

さらに第三に、適切な窓口に行けたとしても、その専門家が「なるほど、この人は助けてあげなくちゃ」と感じてくれるように話せなければなりません。でも多くの場合、必死で助けを求めても「何を言っているのかわからない」「心配しすぎ」などと判断されて、とりあってもらえません。

何をどう説明していいかわからない

後でわかったことですが、たとえば前回記した「小児科医に発症からの経緯を書いて渡したのに、突き返された紙」には、医師が必要とする情報はほとんど書かれていなかったというのです。私はその紙に、娘が何月何日の何時ごろに嘔吐し、何度くらいの発熱で、下

痢便の色が何色で、といった情報を時系列に書いていたのですが、別の医師に「この場合、診断にはそんな情報は不要だよ」と教えられて衝撃を受けました。医師にとって重要なのは、口から下に垂れてゆく吐き方なのか、噴水状にふき出す吐き方なのかといった、吐き方の描写だったというのです。でも、どんな情報を提供すれば医師が目にとめてくれるかなんて、素人の親にわかるはずがありません。だから結局、私としては、「要点を的確に話せる母親」のつもりが、医師にとっては「ぐだぐだと意味のないことを書いてきた母親」になっていたのです。

もしも、保育や教育の現場で、何を言っているかわからない保護者や、話が長いのに肝心なことが何もわからない保護者などに出会った時は、「ああ、この方は何をどう話したらいいかがわからないんだな」と受け止めて、助け船を出してあげてください。親としては、一生懸命話しているつもりなのです。

ともしびとしての保育者

子育ての一番の難敵は、「不安」なのではないでしょうか。そうした親の不安に真っ先に応え、「一緒に考えましょう」という姿勢を示せるのは、間違いなく、毎日子どもと生活して、いわば、子育てのパートナーとなってくださる保育者や教師です。

先の見通せない明日への不安をつのらせる親にとっては、保育者の存在は明日へのともしびです。社会全体が不安定さを増している中で、親子の傍らにたたずみ足元を照らしてくれる保育者の存在は、ますます重要になっているのではないでしょうか。

（上越教育大学准教授）

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（15）

先人たちからの贈り物

椨　瑞希子

お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。
URL：http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/

▼ネット時代とイギリスの保育史研究

私は、イギリスにおける保育の歴史を研究しています。長く続ければよいというものではないので誇れる数字ではありませんが、書いたものが初めて活字になった時から数えて三十五年が過ぎました。この間の研究環境の変貌は著しく、とりわけインターネットの本格的な普及後の変化にはめまいを覚えるほどです。なにしろ、政策動向を知るためについ先ごろまで多大な費用と時間をかけて取り寄せていた政府刊行物が、イギリスで刊行されるのと同時に全て無償で入手できるようになったのですから、その恩恵は計りしれません。

『幼児の教育』がお茶の水女子大学のウェブサイトで公開されているという話は、一年ほど前でしたか、「幼児教育史学会」に集う若い会員から聞きました。存在は学生時代から知っていたのですが、浅学な私の眼にはイギリスの保育史研究に必要な資料とは映らず、最

初に手にしたのは修士課程を終えて何年もたってからのことでした。偉大な保育雑誌の「小ささ」に驚きを覚えたのを、いまでも鮮明に思い出します。

先人たちがイギリスの保育について何を伝えてきたのかが知りたくて、幾度かサイトを訪れました。その都度、私の研究対象を同時代人の眼でとらえていた先人たちの貴重な証言の数々に出あいました。成果の一端を三つほど紹介しましょう。引用文中の字体は改めてあります。

▼先人たちの見たイギリスの保育

その一は、異国における保育制度の在り方の特質を、先人たちが実に的確にとらえていたことです。しかもそれは、今日のイギリスの保育にもかなり当てはまるように思われるのです。

「さて英国では幼児を保育する場所を二つに分けます。……下等社会の子供は小学校に行く前に幼稚学校（The Infant School）に入り、中等以上の社会に属する子供は高等女学校に行く前に幼稚園（The Kindergarten）に行く」

「二種の保母養成所があります。即（すなわち）子供を保育する技術のみに長じて、保母の下働きとなる者を養成すると、技術のみならず、保育の原理を了解する保母を養成する所との二つありて……」

これは、日本における近代女子教育の開拓者の一人である、安井てつ（一八七〇～一九四五）が、創刊間もない一九〇一年の『婦人と子ども』第一巻第三号と第四号に寄せた**「英国幼稚園の状況」**からの引用です。安井は一八九六年に文部省留学生として渡英し、オックスフォード、ケンブリッジ両大学で教育学や心理学を学んで一九〇〇年に帰国したところでした。ここで安井は、イギリスの幼稚園が、日本のように小学校に接続しておらず中等学校（当時の日本の中学校・高等女学校）の予備門となっていること、小学校に接続しているの

は幼稚学校という別種の機関であることを伝えています。そして、前者は中流以上の階層の子どもだけが通う学校系統で、「幼稚学校・小学校」という一般庶民層の学校系統とは交わらないこと、つまり、イギリスには社会階層によって分断された二つの学校系統が存在していて、それが幼児期から保育者養成にまで及んでいることを報告しています。その上で、幼稚園、幼稚学校のどちらにおいても保育内容は**「わが国のに比べますと知育に偏しているようにみえます」**と評していて、私は思わず「そうそう、その通り」と相槌を打ったことでした。

白根孝之の**「英国文部省の幼児保育指針」**（第三十五巻第五号　一九三五年発行）における次の指摘もまた、イギリスの保育の特質を過不足なく伝えていて、私をうならせました。一九二九（昭和四）年発行のHandbook of Suggestions for Teachersの紹介に白根が添えた解説からの要約引用です。

一・**「英国の保育界―のみならず教育の全系統には二つの階級的な流れ」**がある。

二・就学年齢が五歳と定められているので、日本の制度では「保育」と呼ばれるべき時期を含む小学校の低学年部までを紹介しなくてはならない。

三・イギリスには、日本の学校令のような強制力ある統一的な規定がなく、各学校に最大限の自由を認めているので、この指針も目標や大綱を示したものにすぎず、**「実情を知ろうとなれば、個々の学校についてその行っているところを見るほかない」**。

成果のその二は、邦訳資料の発見です。マーガレット・マクミラン（一八六〇～一九三一）の著作物の邦訳（**「保育学校と母性」**第二十六巻第九号　一九二六年発行）を目にした時には、自分の資料探索の甘さをいたく反省しました。マーガレットは、姉レイチェル（一八五八～一九一七）と共に野外保育学校Open-Air Nursery Schoolを開き、貧民幼児の保健と親教育に重

点を置いた保育学校の実践モデルを作り上げた社会事業家で、日本でも早くからその名を知られた人物でした。おびただしい数の雑誌記事と相当数の著書を残しているのですが、その仕事に関する日本語文献はまだまだ乏しく、今後の資料の発掘や蓄積が待たれます。また、**「英国保育学校令竝に訓令」**（第二十三巻第四、五号一九二三年発行）は、ファイルを開いてみると一九一九（大正八）年発布の「保育学校規程」の全訳でした。

第三の成果は、第二点とかかわるのですが、日本の保育関係者が保育学校に寄せた関心の大きさを実感したことです。おそらくは、一九二六（大正十五）年の「幼稚園令」制定前後の論議の中で、保育学校に適当な改革モデルを見出したからなのでしょう。倉橋惣三が第二十三巻第一号（一九二三年発行）に**「英国の保育学校」**を寄せていますし、堀七蔵は**「私の視察した欧米の幼稚園教育（五）、（六）、（七）」**（第二十七巻第九、十、十一号　一九二七年発行）で保育学校をていねいに紹介しています。その十年後、白根孝之は**「イギリス保育発達史（一）（二）（三）」**（第三十七巻第一、二、三号　一九三七年発行）を、一般庶民層の幼児の就学制度が**「当局の進歩的態度と、教育者の努力とによって、次第に完備して来た。その最も大きな結実は保育学校である」**と結んでいます。

▼二十一世紀の保育学校

そこでこのリレー原稿を、保育学校の近況報告で締めくくることにします。

イギリスの保育学校は「一九一八年教育法」によって公費助成の道が開かれ、一九二〇、三〇年代を通じて活発な設置運動が展開され、都市を中心に一定の普及をみました。しかし、第二次大戦後は設置抑制策が続いて、就学前教育全体が停滞してしまいます。それでも保育学校は、望ましい保育の在り方を体現する施設であり、指標であり続けました。

マーガレットが姉の没後にレイチェル・マクミランと名を改めた保育学校も、その厳しい時代をくぐり抜け、いまも当時と同じ場所（ロンドン東南部デドフォード）で現代の保育課題に挑戦し続けています。

かつて、その特徴をなしていた沐浴や検診などは、もはや行われていませんけれども、屋外での活動を重視する保育方針は、いまも変わっていません。園舎は、宇佐美ケイの訪問記（第三十一巻第四号　一九三一年発行）には「木造平屋建の粗末な建物」とありますが、現在は全てレンガ造りで、保育室の一方は園庭に向けて全面が開くテラス窓になっています。

写真（P. 53）は、二〇〇八（平成二十）年三月の訪問時に撮影した園庭の風景です。手前の円柱はマーガレットの業績をたたえて建立された記念碑です。奥に見える大きなビルの位置には、しばらく前までマーガレットの設立した保育者養成校レイチェル・マクミラン・カレッジ（一九三〇～七七、最終理事会開催年をもって

▲沐浴後、髪を整える子どもたち
『幼児の教育』第27巻第11号1927年発行　マクミラン女史の保育学校記念室口絵より

閉校とみなす）の建物がありました。先人たちは、そこに学ぶ女子学生が日々実習生として通ってきて、かいがいしく幼児の世話を行う姿を報告しています。

マクミラン保育学校は、現労働党政権（一九九七～）の方針に従ってチルドレンズ・センター化が図られ、三・四歳児対象の就学前教育部門に加えて、〇・一・二歳を預かる乳幼児保育部門、早朝・放課後保育部門、親支援部門を設置しています。そのほとんどは、もともとマクミランの時代に実施していたことでした。

『幼児の教育』のネット公開によって、私たちは、先人たちがかつて伝えた外国の保育の様子を容易に知ることができるようになりました。その記事の数々は、同時代人のまなざしをもって過去を見ることを可能にする、先人たちからの素晴らしい贈り物ではないでしょうか。

（聖徳大学大学院教職研究科教授）

保育の現場から

四歳児の三月に思う

高橋陽子

四歳児の三月は、「もうすぐ一番大きい組になる」というわくわくした気分でいっぱいです。五歳児の顔つきや生活から、「今度は自分たち」ということが伝わってきたようです。また本園では二月の末ころから、一人が一つ、五歳児へのプレゼント作りをし、卒業式後に年長保育室で渡します。よく一緒に遊んだお兄さんや、あこがれのお姉さんに渡したい、という思いで保育室を訪ねますが、卒業式を無事に終えたばかりの五歳児の雰囲気の中ではなかなか思う人には渡せず、誰に渡した、渡せなかったで、ちょっとしたドラマがあります。

「よく一緒に遊んだ」その一つに、「リレー」がありました。四歳児だけでリレーをやろうとしていると「入ってやるか」と少々年長ぶったような言葉と態度で近づいてきて、さりげなく人数の少ない方に入ったり、順番を教えたりしてくれました。優しくって、足の速いお兄さんは、大人気でした。

「よく遊んでいたのを見た」その一つに、「どろけ

い」があります。一緒にやる時もありましたが、五歳児の足の速さと共に、強い仲間意識の中にはなかなか入れず、遊ぶ様子を見ていました。そして二学期の半ばころから、牢屋を設けない、いわゆる「鬼ごっこ」を自分たちで始めだしたのでした。

四歳児三学期半ばころ

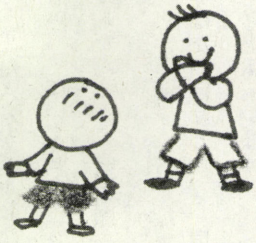
園庭から、「やーめたやめた」と怒鳴るような声が聞こえました。一人の声ではありません。私は「またか……」という気持ちで園庭を見ます。子どもたちも、先生が来て、何か言うだろうということは想像しているようです。こちらと目が合いました。「だって、またA君がズルしたんだもん」と言います。Aも黙ってはいません。「B君だって、C君だって、ズルしただろう」。怒り顔の子どもたちのやりとりの中で、「いつも、おれ一人だけ鬼にさせられる」と激しくはないけれども、心穏やかではないことを口にする子どももいます。

二学期半ばころ

四歳児のこのクラスは、もともと走ったりたたかいごっこをしたり、と園庭で体を動かして遊ぶことが好きな子どもたちが多くいました。二学期の半ばころから、鬼ごっこやリレーを自分たちでも始めるようになったのです。そのころは、「どろけい」のように牢屋に入れるということはなかったので、「鬼ごっこ」と呼んでいました。

リレーは、走る場所が決まっていて(山を一周するリレーです)、バトンをつないでいく、という比較的ルールがわかりやすい遊びです。ところが鬼ごっこは、一人ひとりの子どもの中でルールがいろいろ都合よく変わります。仲良し同士で、自分たちにいいようにルールをかえてしまうことだってできます。

鬼に捕まりそうになると、「バリアー場」に逃げ込みます。その中に、鬼は入れません。十秒経ったら出る、というルールを決めて始めているにもかかわ



らず「休憩中」とか「いま、やめているから」などと言って、何十秒でもそこに居続けます。鬼はたまったもんではありません。また、腕を胸の前で交差させて「バリアー」と言って止まります。そうすると、鬼に捕まらずにすみます。鬼はやっと追いつきそうになるたびに「バリアー」と言われてしまえば、怒りだしたくもなります。それはAに限ったことではないのです。ところが、Aだけが何だか目の敵にされたような言い方をされてしまいます。

A君のこと

一学期、新入児のAは、「こうしたい」と思ったら、何が何でも要求を通そうと主張しました。保育者に対しても「どうしてやってくれないんだ。うわーん。お願いだよお。やってよお」と泣きまねまで加わって、要求してきます。「ちょっと待っていてね」と言っても「やだあ、なんで、いますぐじゃないんだよお」と大きな声で言います。また「明日も使えるように、幼稚園に置いていってね」と提案しても「明日、持ってくるから」と言って、その日作ったものを持ち帰ります。そして翌日忘れて「作って」と要求する。その繰り返しでした。

ほかの子どもたちとも同じようなやりとりはありましたが、繰り返しの中で、保育者の状況を見て待つ、明日も使いそうだから置いていく、ということを自然に受け入れていくようになりました。そんな中で、いつまでも要求を強く出すAを、何だか自分とは違うようだ、とほかの子どもたちは感じていったのだと思います。

それともう一つ。二学期になってAは、アイデアマンのEの作る物が、何でも欲しくなりました。「先生、E君と同じのを作って」と言いに来ます。保育者と一緒に教えてもらいに行くと「なんでいつもまね

ばかりするんだよ」とEはふてくされています。そして周りにいる友達に、「またAは、おれのまねをしてる」とこそこそと言うことがありました。アイデアがあり、器用で、ことばも明瞭で、走るのが速いなど、いろいろな意味で一目置かれているEが言うのですから、周りの子どもたちもAをますます疎ましく感じるようになっていきました。

そして、三月

鬼ごっこに保育者が加わり、大勢で遊ぶ積み重ねの中で「バリアー」のルールを守る方がおもしろいことや、鬼同士、鬼ではない同士が作戦を考える楽しさを味わい、そういうやりとりが子どもたちだけでも見られるようになりました。

ただし、楽しげな遊びの向こう側には、自分たちに都合よくしたり、誰かをのけ者にしたりする姿もまだまだ見られます。それが子どもの世界なのでしょうか。

四歳児クラスに新入・進級し、一年間過ごしてくる中で、友達のあれやこれやがわかってきます。気の合う友達、合わない友達、保育者の対応の仕方まで、子どもたちは自分の感覚でとらえていて、それをいろいろな方法で表出します。Aのように、三学期になって、友達の自分への態度に気づくようになった子どももいます。まだまだ、どう見られているか、気にしない子どももいます。

同じ時間、同じ空間で過ごしてきても、年長の遊びを同じように見てまねてやってみても、それぞれのやり方も楽しみ方もみんな違うようです。

四歳児の三月「もうすぐ一番大きい組になる」ことの期待感の中に、「お互いを認め合って」とか「ルールを決めて」という、この先何年間もかけて作り上げていく大切なことを、どう伝えていきましょうか。一人ひとりの子どもたちや遊びから、いろいろなことを考えさせられるこの時期です。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(39)〉

保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み」を振り返って(2)

菊地知子

二〇〇八年五月に開催された第六十二回日本保育学会での自主シンポジウム後半の様子をたどろうと思います。二月号に記載した話題提供者によるそれぞれの保育の場での話を受けて質疑応答がなされ、その後、指定討論者からのお話がありました。以下その詳細です。

シンポジウムの実際(後半)

津守房江(保育研究者)　「総合的保育者養成」という、この目新しい言葉は何だろうと思い、『幼児と教育』の〈幼・保・大連携〉のページを、現在からさかのぼって一冊ずつ見ていきました。この言葉自体は二〇〇七年の秋ごろに出てきて、その根拠のようなこととして、二〇〇八年一月号の巻頭言に、新しい時代に自分たちに要求されていることは何か、家庭とは何か、保育とは何かを根本から考えていこうと、今日の司会の浜口先生が明快に書いていました。そしてその証として、『幼児の教育』の表紙の「家庭・保育所・幼稚園」という文言を、「乳児期の育ちと保育を考える」と変えた。時代の流れが大きくある中で変わったんだと思うんです。

さまざまな社会情勢の中で、総合的保育者養成というものが生まれてきた。それはきっと、最近頻繁に言われる保育者の専門性ということとは少し質の違う議

論なのだろうと思います。実習先のどの保育の場も、それぞれにいろいろな制約がありながらも、子どもが生きるということをちゃんと考えようとする方向性をもち、今日のこのシンポジウムに至っている。私たちが目指す保育は、ただそれぞれの場でうまくやり、名声を博すようなものではなく、どこにいようと子どもの視点、弱い者の視点に立とうとしてそれを支援していくというものだと思います。それをこれからの方向にしていこうと、二〇〇七年のそのあたりで切り替えられた。舵を切ってまだ二年ですから、これからまだどんどん変わるだろうととても楽しみにしております。

牧野（お茶の水女子大学名誉教授） 保育の広い資質というのは、ケアの問題と深くかかわっています。社会学や家庭科教育学が専門の立場からは、ケアというのは、ケアされる側、つまり当事者のニーズ、心に沿う、という社会的な活動として成り立ってきたと言えます。介護の研究で、高齢者や障碍のある人の立場に立つ人は、それらの人々は当事者であるということをずっと言い続けてこられました。では、生まれたばかりの赤ん坊はどうか。最も弱い存在で、私のことを代弁してくださいと言えないような子どもたちは、実はまさに、当事者そのものなのですね。その子どもの側に立てるかどうかということは、日本が経済的に発展し、能率的・効率的な社会になってきた中で、最も非能率的で非生産的、最も経済効果を生まないというような存在に私たちは目を向けることができるのかどうか、ということです。物が豊かになることでいかにも人間が幸せになったように思われる中で、私たちは改めて、経済中心ではない世の中を考え直さなければならない。

乳幼児や障碍のある子どもたちを受け入れている施設に行った学生が、変化し育てられてくるということは、赤ん坊の中にその力があり、その力を、周りの環境が引き出せる、ということではないか。そのことの意味を学生たちに伝え、乳幼児、障碍のある人たちの中にある力を汲み取れる、そして心を汲み取れる人を育てるようなカリキュラムを、受け入れ側と一体と

なって考えていこうというのが、シンポジウムを主催した幼保プロジェクトのねらいであるということをおわかりいただけるとありがたいと思います。

質問者　子どもの側に立つ、赤ちゃんの側に立つとはどのようなことなのか、うかがいたいと思います。

牧野　子どもの側に立つということをたくさん発信してくださっている津守真先生、お話しください。

津守真　赤ちゃんがこのシンポジウムの中に居たらどういう発言をするのか。ついこの間自分の脳が壊れたところだったので、いま私はちょうど、当事者である赤ん坊に近いところにいる一人じゃないかと思いますが、答えを出すのはとても困難です。いままでにカリキュラムというと、行政の側から、保育士の側から、幼稚園教員の側から、学者の側からと、随分出そろってきてはいますが、それらで答えを出そうとしても、多分うまくいかないんじゃないかという気がします。赤ちゃんや、重度な障碍をもった人たちが、この中でどう発言ができるのか、発言は許されるのか、議会はそれをどんな眼で見るのか、行方に期待しています。

房江　私はいつも具体的なことで考えますけれども、赤ちゃんの側に立つということ、弱い立場の側に立つということは、いつもそのことを心に思っていれば、はっとした時、本当にとっさの時に、力を出せるんじゃないかと楽観的に思っています。常識的な流れからは少し違った何かを、新しくしようとする時にはいつも、変えなきゃならないことは変える勇気をもつこと、そして変えなくてもいいことに対しては心穏やかにそのことを見ていること、変えることと変えないことの違いを見分ける知恵があること、そういうことが大事なことだと思っています。

牧野　いま、ここに赤ちゃんが居たら、どのように存在しどんな発言をするだろうかという想像力、いま、この場でも赤ちゃんを考えられるその心を、津守先生が言ってくださいました。赤ちゃんを理解することを一つの答えで言うことは難しいかもしれない。私は、じっくり赤ちゃんを見ることの中から、声にならない、

言葉をもたない赤ん坊の言葉を読み取る、心を読み取る、気持ちを読み取る、ということなのではないかと思います。ご一緒にいつまでも考えていきたいと思います。

佐藤（障がい児放課後クラブはすねっこ代表） 昨日ここに来る時、久しぶりではすねっこに来ていた男の子が「遠くに行っても僕のことを忘れないでね」と言って見送ってくれた。その子は、去年の秋口、中学生から高校生になる進路の話が出るようになったころ、その子にとっていろいろな思いのあるものをたくさん詰め込んだかばんを家から背負ってやってきて、それをはすねっこに託す、預けて帰るというようなことがあった。そうすることで彼の負担が軽くなっているんだろうか、とか、彼自身が自分の中で何かを変えようとしているんじゃないかと、何となく感じてはいたけれどその時点で答えのようなものはなかった。だけど昨日、高校に入って初めて久しぶりに来たはすねっこには、中学の卒業アルバムだけを持ってきた。中学校から高校に上がる彼と三年間、彼と僕、彼とスタッフ、いろんな人たちとのその時々の出会いがあり、その関係性や出会いを積み重ねてきた。そこに学生さんたちが来てくれてどんな出会いを子どもたちとしてくれるのか、そういう場をどうやって作れるのか、ということは、常々考えてやっているような気がします。学生さんとお話しする中で、自分でも感じてはいたけれども改めてああそういうことだった、と思ったり、またそれを学生さんたちに言葉として返したりというやりとりをしている。はすねっこは、地域（の居場所）という、職業的であるとか資格とか免許には全く関係ない場所です。そこで学生さんたちが子どもたちと出会い、一緒に生活をつくってくれている、その一員になってくれているということに本当に感謝しています。

私市（お茶大附属いずみナーサリー主任） 先ほどから私は、赤ちゃんの側に立つってどういうことなんだろうということしか頭になくて、たとえば睡眠の場面で泣くということで考えてみました。その子の生活の

中ではもう眠いはずだからと思って布団に入れる、でも寝ないでわんわん泣いている時もある。それを私たちは、この子はこの時間にもう絶対に寝るものと頭で判断して寝かしてしまうのか。そうではなくて、寝ない時にもう一度立ち止まって、振り返って、どうしてこの子は寝ないのかなあって考える、ということがすごく大事なんじゃないか。理屈ではもう寝る時間、これはもう寝る表情と、学生さんにとってはそうだとしても、知っている理屈や理論とは違う場面が現実の保育の中にはある。それを私たちが、どんなに長くやっていても自分のつたなさに気づいたり、謙虚に子どものことを考えて、言葉の言えない子どもの立場に立ったりするということが子どもの側に立つということなのかなって思いました。

浜口　学生たちは実習の場で、一人の人間の本当の人生に出会っている。また、その実習先が置かれている社会や抱えている困難も垣間見るのだと感じました。

宮里（お茶大附属幼稚園副園長）　赤ちゃんや幼稚園の子とか、ここにいろいろな子が居たらいいのにと思いました。それから、子どもの側に立つというよりも、子どもの居場所に出ていくことで、思いもかけず子どもの側が飛び込んでくる、という感じがあるのかもしれないと思いました。総合的保育者という言葉についても考えてみました。小学生と中学生が一緒の授業を受けると、中学生が学生のみずみずしい感性、素直な反応によって向き合い方が変わるとか、高校生が幼稚園に来ておもしろいとか、異年齢が共に居るということや学び合い、つながり合い、何かを失いつつ成長しつつあるということなどをていねいに考えていくと、総合的保育者ということを意識しながらの養成の意味が見えやすくなるのかなと思ったりしました。そして、いったいどこへ行くんだろうって思えるシンポジウムって素敵だなあと感じました。

質問者　方程式的ではない実習からの学生の気付きについてお伝えいただければと思います。

高橋（お茶大附属幼稚園教諭）　私たちは本当に、学

生さんに子どもや自分自身のありのままを感じてほしいし、泣いてしまうようなその人であっても私は受け入れようと思っています。でも、全部そのままで実習を終えてほしくないという気持ちはもちろんあるので、ちょっとこういうふうに見てみたらとか、考えてみたらとか、伝えようともします。でも、私たち教員とのかかわりからだけではなく、子どもとのかかわりそのものの中で学生さん自身が変わると感じています。

牧野　いろんな在りようの子どもと接することで私たち自身も、まさにその人間関係の中で育てられるのだと思うのですね。一生懸命その人の話を聞くという体験をしてみると、そんな言葉を使うのか、そんな考えをもつのか、そんなに泣くのか、と、違うタイプの人と接するということが私たちを豊かにし、成長させてくれると思います。子どもと触れるということの中で中学生も高校生もそして大学生も、豊かさを広げていってほしいとしみじみ思っております。

房江　学校（大学）で学ぶということが、社会に出てからの（職業など狭い意味での）モデルではなくて、人生のモデルになるようなものであったらいいなと思います。学校が免許や免状をもらうために行くところ、というのでなく、生きることの本質がところどころでピカッピカッと光るようなところであってほしいと願っています。私は、自分がずっと保育を、保育学を学んできて本当によかったと思うんです。家族が病気になった時、家族が出て行った時、失敗した時、そんな時自分はどうやって立つのか。立つじゃない、寝ているかも知れませんが、どうやってもちこたえるかっていうことを学んだと思っています。

浜口　お茶大での養成は、お茶大生が将来生きることに活かせる養成ということになりますが、これがお茶大の枠に納まらずに、どこかで社会につながっていくことを願いながら頑張っていきたいと思います。ご協力よろしくお願いいたします。

今日はどうもありがとうございました。

（幼保プロジェクト専任講師）

編集後記

年間特集「いま、倉橋と出会う」の今月のテーマは「子どもたちを送る日」です。『育ての心』所収のこの小文に続く「詫びる心」という段にも、倉橋惣三の大人としての自らを戒める省察があります。「3月末の賑やかさと、はなやかさとの後に、子どもには知らせずに、そっと独りで詫びたい心が残る」と。

別れと門出の間に立ち会って子どもを見つめる大人のまなざしは、複雑な心のひだの狭間に揺れ続けています。それはちょうど、昭和20年10月に再版された『育ての心』の序文で、敗戦の日本を歩みだす子どもの背中を、心苦しさと頼もしさの「一つにこみあげてくる心もち」で、抱き上げたくなる気持ちをこらえて見送る倉橋の姿にぴったりと重なります。（H）

幼児の教育 第109巻 第3号

平成22年3月1日発行
編集兼発行人　浜口順子
編集担当　金子めぐみ
発行所　日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所　株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振　替　00190-2-19640
印刷所　図書印刷株式会社
定　価　550円（本体524円）

©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力　フレーベル館
表紙絵　後宮ひろみ
扉題字　津守　眞
本文カット　田崎トシ子
編集スタッフ　髙橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う（4）
「生活を生活で生活へ」

上垣内伸子・青山昌子
●インタビュー4●　堀合文子（聞き手・佐治由美子）

◇新連載◇　園のくらしを育む（1）　秋田喜代美

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始まりました！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/ へアクセスしてご覧下さい。
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。ご意見ご感想などは、youjimail@yahoo.co.jp までお寄せ下さい。

最新刊

新学期、これさえあれば安心！

保育所対策　個々の発達過程に対応

10914

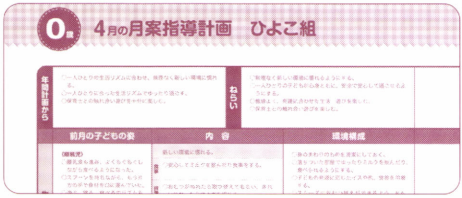
年間計画から日案まで見通せる誌面構成！

発達過程に着目した 保育所 指導計画作成のすべて

22年2月刊行　民秋 言／著

発達過程に着目し、0～6歳までの育ちの流れが一目瞭然！　見通しをもちながら指導計画の作成ができる。

26×21cm　296ページ　定価2,415円（税込）



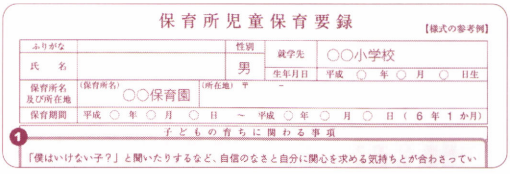
3つのパターンで記述を紹介！

保育所児童保育要録の書き方

21年7月刊行　民秋 言／著

一人ひとりの子どもの育ちを捉え、どう小学校へ伝えるか。保育要録の記入のポイントがわかる。

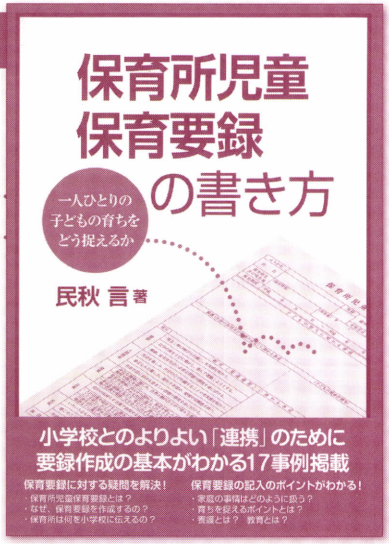
26×19cm　96ページ　定価1,050円（税込）


保育所児童保育要録　【様式の参考例】

ふりがな		性別	就学先	○○小学校
氏　名		男	生年月日	平成　○　年　○　月　○　日生
保育所名及び所在地	（保育所名）○○保育園	（所在地）〒　－		
保育期間	平成　○　年　○　月　○　日　～　平成　○　年　○　月　○　日（6年1か月）			

❶ 子どもの育ちに関わる事項

「僕はいけない子？」と聞いたりするなど、自信のなさと自分に関心を求める気持ちとが含わさってい



36210

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇九巻　第三号　平成二十二年三月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

好評発売中

『幼児の教育』の連載企画本

倉橋惣三も編集主幹を務めた『幼児の教育』が、2010年に創刊より109年を迎えた。
その中から、連載内容をまとめた企画本もさまざま発刊され続け好評を得ている。

津守との対話から保育の原点を知る!

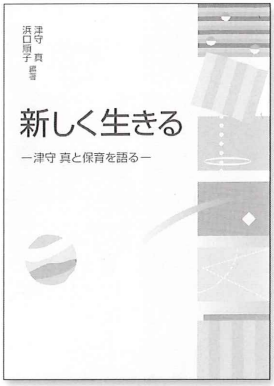
新しく生きる
ー 津守 真と保育を語る ー

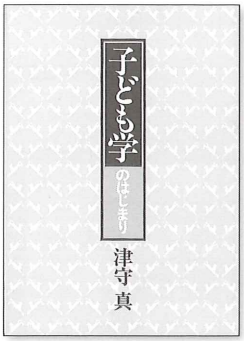
津守 真・浜口順子／編著

『幼児の教育』に連載された津守の論考を受け止め、7名の研究者・保育者たちがそれぞれの子ども・保育理解を浮き彫りにし、津守との対話を試みる。いまもなお“新しく生きる”津守の姿から、保育の原点を知る。

21×15cm　230ページ　定価2,100円（税込）

2009年12月刊行
10745





子ども学のはじまり

津守 真／著

子ども学の決定版!
20刷 好評発売中!

子どもの行動の見方と研究法について、著者が長年考えてきたことを論述。保育の原点を示唆し、人間学的保育学のスタート地点を示す。

19×13cm　296ページ　定価2,100円（税込）

1979年1月初版
15600

保育の中の小さなこと大切なこと

守永英子・保育を考える会／著

日々の保育には、見過ごしてしまいそうな“小さなこと”の中に、大切なこと”が隠れている。それらを拾い上げて、その意味を知る。

21×15cm　224ページ　定価1,890円（税込）

2001年4月初版
36400

子ども100年のエポック

-「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで-

本田和子／著

20世紀、この100年の「子ども観」「子ども一大人関係」の変遷を跡付け、21世紀の「子ども」の新たな可能性を展望する。

20×14cm　280ページ　定価2,100円（税込）

2000年4月初版
35700

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆